

## 商工会館・公開セミナー

### 社会インフラの輸出競争力

#### 「問題提起」

児玉文雄

故青木昌彦氏によれば、「失われた 20 年」の間に、日本の都市は生活上の便利、質、機会均等という点で、世界に先駆けた。そこで、失われた 20 年ではなく「移り行く 30 年」の途上であると考えらるべきだという（青木<sup>i</sup>, 2014）。

技術開発についても、「移り行く技術概念」という表現が成立し得ると筆者は考える。本質的な変化は、アナログ技術の世界では、組み合わせは容易ではなかったが、デジタル技術の浸透により、基本的には、すべての組み合わせが可能となり、単純和以上の効果が期待できるようになったのである（Newsweek<sup>ii</sup>, 1999）。中心課題が、「組み合わせの選択」へと移って行ったのである。

失われた 20 年の間に、静かに進行し、目立たない形で、社会の利便性を大きく向上させた事例を、例示したい。鉄道を社会基盤の第 1 次社会インフラとすると、Suica は生活基盤としての「第 2 次社会インフラ」と言える（椎橋<sup>iii</sup>, 2015）。国鉄 100 年の歴史でつくりあげてきた『改札業務』を IC 乗車券のルールに変更するには抵抗も大きく大変であった。1987 年から基礎研究を始め、16 年という長い歳月をかけて、実用化に至ったという。

交通系で開発された Suica 技術の発展は、今や、生活基盤のサービスに広く及んでいることは、周知のことである。Suica 技術を世界に広く普及させる計画があるという。しかし、この事例に見られる発展・進化のプロセスは、「モジュール化」、「コンバージェンス」という技術概念では、到底説明できない（Kodama<sup>iv</sup>, 2014）。

日本の社会インフラで起きた技術革新を慎重に分析し、変わりゆく日本の輸出競争力に、どのように結びつけていくかを議論したいと考えた。失われた 20 年の中から、「宝」を見つけ出し、今後の日本の輸出競争力の源泉にできないだろうか？

## 引用文献

- 
- i 青木昌彦 (2014) : 「青木昌彦の経済学入門：制度論の地平を拓げる」、ちくま新書.
  - ii Newsweek (1999), “Convergence: Embracing a Millennium of Changes,” Special Advertising Section, June 21.
  - iii 椎橋章夫 (2015) : 「Suica が世界を変える」、技術と経済、2015年9月号、18～28.
  - iv Kodama, F., (2014): “MOT in transition,” Technovation 34, 505-512.